Ⅱ　グローバル研修報告

１　県内留学生等との異文化交流

Takamatsu Kita Junior and Senior High School Global Expo Ⅱ

（１）研修の目的

グローカル事業の一環として，香川県内に居住する外国人留学生を招いて，日本や香川の文化を味わってもらうとともに，おもてなしや交流を通して，本校生徒の異文化理解を深め，国際感覚を磨き，英語コミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

（２）研修の概要

名称：Takamatsu Kita Junior and Senior High School Global Expo Ⅱ　※昨年度から始めて第 2 回の開催

日程：令和 3 年 6 月 20 日（日）10:30～15:00

場所：大西・アオイ記念館（高松市上林町 148 番地）

来場者：外国人留学生 29 名（香川大学 13 名，穴吹カレッジ 16 名）

参加生徒：茶･華道部 12 名，邦楽部 12 名，書道部 11 名，合唱部 18 名，
吹奏楽部 10 名，応援部 14 名，ボランティア 10 名　　計 87 名

指導・引率教員：國木，齋藤，松本，宮宇地，三枝，伊澤，徳善，小林，大野，青井，櫛橋，
髙橋，筒井，加藤，和泉，篠原，西村

主な研修内容

外国人留学生を招待し，記念館内に「茶・華道」「邦楽」「書道」「合唱」「吹奏楽」の 5 つのコーナーを設け，本校中高生がそれぞれの日々の活動内容や，日本文化の特徴・歴史について英語で紹介し，「茶道体験」「琴の演奏と体験」「書道パフォーマンス」「合唱披露」「吹奏楽演奏」を行った。また，催し終了後には「応援部」の英語によるコントとエールで留学生・研修生をお見送りした。

（３）成果

昨年度末に協定を結んだ，香川大学，穴吹カレッジから，計 10 ヶ国，29 名の外国人留学生を招いて Takamatsu Kita Junior and Senior High School Global Expo Ⅱ を開催した。

① 昨年度に引き続き第 2 回の開催となった。参加する部活動・生徒数ともに増えて，内容もより充実したものとなった。どの部も日本文化を強く意識した演奏や体験活動となっており，外国人に日本を理解してもらうための良い機会となった。

② コロナ禍ではあったが，生徒たちは早い段階から準備をすすめ，留学生へのイベント案内リーフレットを英語で作成し，関係機関に配付した。日本文化を外国人に伝えるために，部員同士で英語表記について意見を交わすなど，英語の表現力を身につけることができた。

③ それぞれの部のイベントの前に，活動内容・日本文化のしきたりや意味などについて英語で説明した。これも英語力の向上，また，プレゼテーション力の育成につながった。

④ 英語での案内役のボランティアを募集したところ，今年度は高校 1～3 年生 10 名の生徒がすすんで参加してくれた。事前に各自が英語でのあいさつや案内方法など，基本的なコミュニケーションについて十分な学習ができた。

⑤ コロナ禍で当日の活動には制限があったが，各コーナーで，できるだけ体験活動を取り入れ，会話を交えた活動ができた。また，多くの生徒が留学生にインタビューするなど，外国人との交流を深めることができた。さらに 2 年生のボランティア生徒は，自分自身の探究テーマについて英語で聞き取り調査をするなど，探究活動の深化につなげることもできた。

⑥ このイベントにより，多くの生徒が英語力，コミュニケーション力，プレゼンテーション力を伸長させることができた。次年度以降は他の大学の外国人留学生や，協定を結んでいる公益財団法人オイスカの外国人研修生も招いて，今年度よりもさらに進化した取組としていきたい。

To the exchange students of Kagawa University

Takamatsu Kita Junior and Senior High School Global Expo Ⅱ

Takamatsu Kita Junior and Senior High School is going to host "The Global Expo" for the exchange students in Kagawa. Why don't you join us?

Date: June 20, 2021 [Sun] 13:00～15:00
Place: Onishi Aoi Memorial Hall 148 Kamibayashi-cho Takamatsu
Program: 1. Japanese Koto performance and workshop
2. Chorus performance
3. Brass band performance
4. Calligraphy workshop
5. Japanese tea ceremony

*Admission is free.

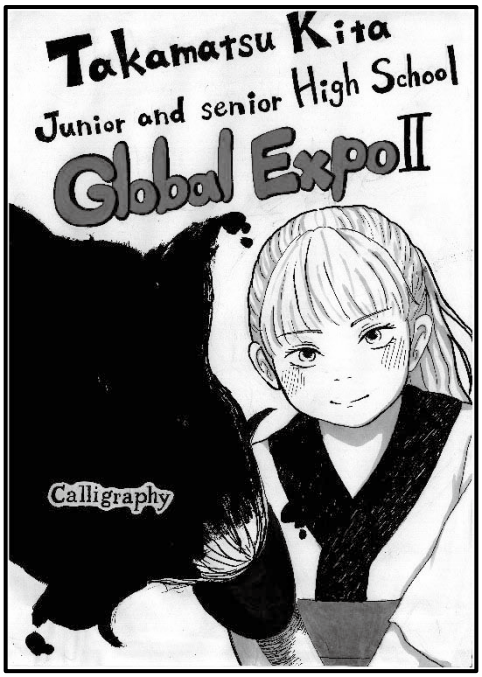
*We will take you to and from the Memorial Hall by bus.

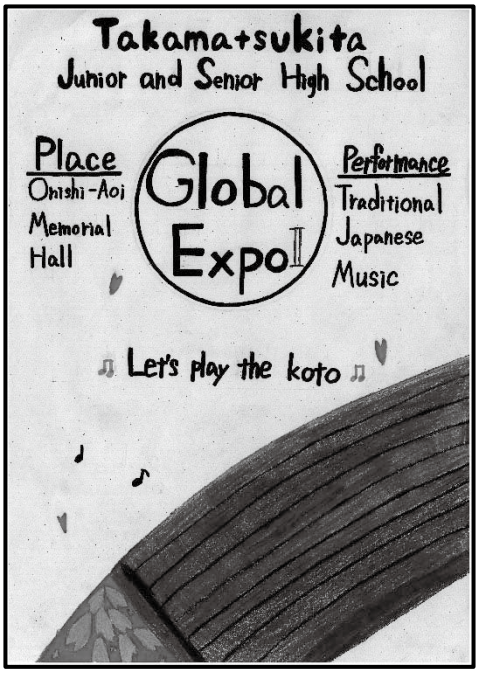
Bus departure location and time

Saiwai-cho campus
The street between the Department of Education building and the Department of Economy building
12:00

The Department of Agriculture campus
near Hatada
12:35

Hayashi-cho campus
at the bus stop
12:50





Takamatsu Kita Junior and Senior High School Global ExpoⅡ Questionnaire

Thank you very much for attending our expo today. We would like you to answer this questionnaire. Your cooperation would be highly appreciated.

A Please rate your satisfaction with each of today's events and students' attitudes towards you. Choose the number that is the truest for you based on a scale of 4 to 1.

Scale: 4= Extremely satisfied 3= Satisfied 2= Dissatisfied 1= Extremely dissatisfied

a. Tea Ceremony
(4 3 2 1)
b. Traditional Japanese music played on the Koto
(4 3 2 1)
c. Calligraphy
(4 3 2 1)
d. Chorus (Traditional Japanese songs)
(4 3 2 1)
e. Brass band (Traditional Japanese songs)
(4 3 2 1)

B For each of the following statements, please choose the number that is the truest for you.

a. Today's events helped me to more deeply understand Japanese culture.

Scale: 4=Strongly agree 3=Agree 2=Disagree 1=Strongly disagree
(4 3 2 1)

b. Today's events were a good way to promote international exchange.

Scale: 4=Strongly agree 3=Agree 2=Disagree 1=Strongly disagree
(4 3 2 1)

C Would you like to tell us more in your own words concerning today's events? If so, please add any comments in the space below. We will read them carefully. Thank you.

We are truly grateful for your cooperation.

２　台湾　啟英高級中等学校　オンライン交流

（１）交流の目的

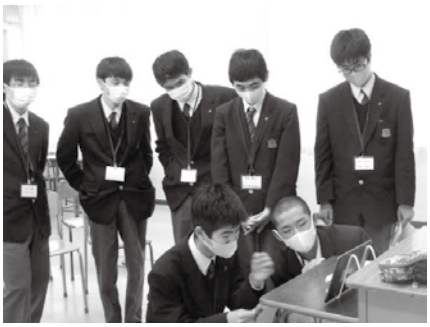
台湾は，歴史的にも日本と関係が深く，親日の地域として近年急速に友好関係が深まっている。その台湾の同世代の学生との交流を通じて，国際理解や国際協調の意識を高め，将来グローバルな視野を持って地域の発展に貢献する人材の育成を図ろうとするものである。

（２）交流の概要

日　　程：令和３年３月 25 日（木）14：00～16：00（日本時間），13：00～15：00（台湾時間）
場　　所：高松北高校ＨＲ教室（メイン会場１，グループ別会場４）
交 流 校：桃園市啟英高級中等学校
参加生徒：高校２年飛翔コース３８名
Web 会議システム：Google Meet
主な内容：①開会行事
②グループ別交流
・自己紹介，学校紹介
・テーマ別交流　コロナウイルス流行期間中の学校の対応や防疫対策について
台湾と日本の部活事情や時間割の違い
台湾の学園祭と日本の文化祭の違い
③全体交流
・各グループ代表による発表
・質疑応答
④閉会行事

（３）成果

コロナの影響により海外研修を全て中止せざるを得ない状況の中，海外とのオンラインでの交流が実現した。外国の人との交流が初めてという生徒もおり，どの生徒も最初は緊張していたが，事後の感想では，交流できてよかった，もっと交流したかった，という意見がほとんどで，異なる言語に触れ，異文化に触れ，どの生徒にも，国際理解についての何らかの気付きがあったと考えられる。交流自体はごく短い時間であったので，具体的な生徒の成長が見られたというものではないが，この交流をきっかけに，国際理解，国際協調に関する意識の向上は少なからずあったと考えられる。コロナの影響で様々な制約があるが，その中でも，このような事業を企画していくことで，生徒の体感力の向上につながっていくと考えられる。



３　韓国　京仁高等学校　オンライン交流

（１）交流の目的

韓国の同世代の学生との交流を通じて，国際理解や国際協調の意識を高め，将来グローバルな視野を持って地域の発展に貢献する人材の育成を図ろうとするものである。

（２）交流の概要

日　　程：令和３年７月 19 日（月）11：00～13：00
場　　所：高松北高校ＧＳルーム
交 流 校：京仁高等学校
参加生徒：高校２年グローバルコース４０名
Web 会議システム：Zoom
主な内容：①開会行事
②全体交流
・各グループ代表による発表
(1) 学校や住んでいる街の紹介
(2) 各国の高校生たちが興味を持っていることは？
(3) 出し物発表会
・質疑応答
③閉会行事

（３）成果

新型コロナウイルスの影響で，現地に行くことは叶わなかったが，オンライン交流という形で，韓国の学生と交流ができた。昨年度，このクラスの多くの生徒は韓国の方と交流する機会があったので，先行知識を持った状態で交流に臨むことができた。また，Ｋポップをはじめとした韓国の文化に興味を持っている生徒も多かったため，意欲的に交流に取り組むことができた。本校の生徒も積極的に英語や韓国語を使ってプレゼンテーションや出し物を行っていたが，韓国の生徒たちの流暢な英語，日本語に圧倒される場面もあった。「自分達も頑張らなければいけない」と感じたのか，事後の授業の様子から，学習意欲の向上が見てとれた。また，事後の感想でも，「もっと長い時間交流したかった」，「実際に現地に行って，今度は対面で交流したい」という前向きな感想ばかりだった。オンラインという形だからこそ，「画面上でどのようにすれば相手に伝わりやすいか」，「パワーポイントをどのように作成すればよいか」等のことを生徒がよく考え，多くの成果があった交流会であった。

４　エンパワーメントプログラム

（１）研修の目的

5 日間のオールイングリッシュでの活動を通して，英語運用能力の向上を図るとともに，プレゼンテーションやディスカッションを通して，これからの国際社会を生き抜くうえで必要である英語での情報発信能力を身につけ，グローバル人材として必要な能力であるグローバルコンピテンスの習得を目的とする。

（２）研修の概要

期間：令和 3 年 12 月 24 日（金），25 日（土），26 日（日），27 日（月），28 日（火）

時間：12 月 24 日　11:00～16:50

　　12 月 25 日～28 日　9:00～14:50

場所：高松北高校 GS ルーム

講師：アメリカ人講師 1 名（株式会社アイ・エス・エイより派遣）

　　外国人留学生 6 名（株式会社アイ・エス・エイより派遣）

参加生徒：高校 2 年飛翔コース 37 名（男子 26 名，女子 11 名）

担当教員：大石，西村

主な研修内容

① 英語運用能力向上のための活動：各グループ 1 人ずつ配置された外国人留学生であるグループリーダー（以下：グループリーダー）との会話やアクティビティ

② 情報発信能力の向上のための活動：各グループによるプレゼンテーションやディスカッションなどの活動

［１日目の活動内容］○オープニングセレモニー・自己紹介

○このプログラムで成し遂げたい目標を設定し共有する。

○クエスチョンニンジャ（英語で絶え間なく質問をする）

○グループリーダーによる，夢とその実現のために努力していることについてのプレゼンテーションを聞いて，質疑応答をする。

○各グループで自分の夢とその実現のために努力していることについてプレゼンテーションを行う。

［２日目の活動内容］○Positive Thinking について考え，各グループでディスカッションを行う。

○質疑応答をしてグループリーダーについて知る。

○校内ツアーを行い，環境に優しい学校を作るための案をプレゼンテーションで発表する。

［３日目の活動内容］○アイデンティティについてグループでディスカッションをする。

○複数のトピックから１つ選び，それについてプレゼンテーションを行い，互いに質疑応答を行う。

○テクノロジーと自分たちの生活の関係を考え，スマートシティに関する考えをプレゼンテーションする。

［４日目の活動内容］○リーダーシップに必要な力について考え，ディスカッションを行う。
○自分の将来の目標について各グループでディスカッションを行う。
○将来の目標達成のために学ぶことの意義について，グループでディスカッションを行う。
○本プログラムを通して，自分が達成したことや将来の目標についてのプレゼンテーション原稿を作成し，グループリーダーに添削をしてもらう。

［５日目の活動内容］○ダイバーシティ社会について考え，グループリーダーの出身国と日本を融合した国を作るという設定で案をプレゼンテーションをする。
○一人一人による，本プログラムを通して達成したことや将来の目標についてのプレゼンテーション

（３）成果

海外語学研修と比べて，5 日間と日数も短かったが，毎日プレゼンテーションやディスカッション等全ての活動を英語で行ったため，とても内容の濃い期間であった。英語が苦手な生徒はこのプログラムに参加すること自体に緊張していたようだったが，5 日間のプログラムが始まれば，グループリーダーのファシリテーションや講師の声掛け等の助けにより，積極的に英語を使い，コミュニケーションをとろうとしていた姿を見ることができた。最終日のプレゼンテーションでは，本プログラムを通して英語を使うことの楽しさや必要性を感じたと話した生徒が多く，更にこれから英語の勉強により一層力を入れたいと話した生徒も多く見られた。英語を学ぶことは必要でないという考えを払拭し，国際社会を生き抜くためのスキルの向上の一助になったと考える。

Ⅲ　国内課題探究研修報告

１　１年生分野別県内研修

（１）研修の目的

探究の分野・テーマが決まった１年生に対して，テーマに関連した県内施設等を訪問し，施設等の見学，担当者からの講話等を行うことにより，現状や問題点を認識し，テーマをさらに具体的なものとし，今後の探究につなげていくことを目的とする。

（２）研修の概要

１学期末保護者懇談の期間中，７月１５日（木）から２０日（火）の平日（４日間）の午後に行った。行先や参加人数等は以下のとおりである。

分野	研修先	おもな内容	日程	参加人数
グローバル	栗林公園	案内ガイドによる講話・園内案内 グループ活動	7/20(火)	41
芸術	高松市美術館	学芸員による講話 アートカードゲーム 展示物鑑賞・バックヤード見学	7/15(木)	34
スポーツ	香川県総合運動公園	職員による講話・施設見学 香川オリーブガイナーズ選手・社長との交流	7/19(月)	54
防災・環境	高松市防災合同庁舎	職員による講話 冠水監視システム見学	7/16(金)	17
	香川大学 四国危機管理教育・地域連携推進機構	教授による講話および施設見学 避難訓練シミュレーション体験	7/15(木)	25
看護・医療・福祉	香川大学医学部	地域医療についての講義，施設見学 スキルラボラトリー体験 ドクターカー見学	7/19(月)	21
	穴吹医療大学校	講義，施設見学,グループワーク	7/15(木)	19

グローバル分野では，県内の主な観光地である栗林公園を訪れ，地域の観光地としての魅力を知ると同時に，国際化の観点から主に外国人観光客の誘致にどのような取組や工夫をしているかなどについて案内ガイドから講話をいただいた。その後，実際に園内を回り，観光客の立場に立ってガイドによる専門的な説明を受けた。観光地の現状と課題について理解を深めた。

芸術分野では，高松市美術館を訪問し，学芸員より地域の美術館の役割や取組について講話をいただいた後，アートカードゲームと施設見学を行った。施設見学では普段見ることのできないバックヤードも見学することができ，これらの活動を通し，芸術に親しむと同時に，芸術を広める意義や方法について理解を深めた。

スポーツ分野では，香川県の中核的なスポーツ施設である香川県総合運動公園を訪問し，施設の運営等についての講話をいただいた。その後，公園内にあるレクザムスタジアムで，施設見学をしたり，香川オリーブガイナーズの練習を見学したりした。また，香川オリーブガイナーズの選手や社長さんにインタビューをお願いし，スポーツと地域振興について考えた。

防災・環境分野は，２か所に分かれて研修を行った。高松市防災合同庁舎では，担当職員による高松市における防災についての講話のあと，災害対策本部室で冠水監視システムを見学させていただいた。また香川大学では，同大学の危機管理研究センターが開発した３次元バーチャルリアリティを用いた災害状況再現・対応能力訓練システムによる避難訓練シミュレーションを体験した。教授による講話もあり，避難時には地域の特性に応じた対応が必要になることを教えていただくなど，防災についての基礎知識を学ぶと同時に，改めて自分の身の回りに起こりうることとして考える機会を得た。

看護・医療・福祉分野は，２か所に分かれて研修を行った。２か所とも、地域医療の現状と課題等

について講話をいただいた後，香川大学医学部では、実際に内視鏡手術の操作を学び，スキル向上を目指すプログラムであるスキルラボラトリーを体験したのち，ロボットが手術を行うダヴィンチやドクターカーなど最新の設備を見学した。また、穴吹医療大学校では，あらかじめ提出しておいた質問に答えていただく形で専門の先生によるグループワークを行った。これらの研修を通し，漠然としていた地域医療の課題等について，より明確にすることができた。

（3）成果

自分たちが設定したテーマと直接関係のある施設への訪問とはならなかったグループもあるが，コロナ禍でグループごとの訪問や実体験が制限される中，専門家から話を聞いたり，施設を見学したり，体験をしたりすることができた今回の県内研修は，生徒たちにとって大変有意義なものであった。テーマを深化させたり，フィールドワークの調査方法について考えたりしていた時期でもあり，研修を通して，すでに考えていたテーマをさらに深く掘り下げた班，新たなテーマや着眼点を発見した班，フィールドワークの方法について再考した班などが見られた。また，現地で自分の目で見て，実際にお話を伺い，疑問点はその場ですぐに質問し回答を得るという貴重な経験をすることができた。さらに，ただ何となく話を聞くのではなく，「何を聞くか」を明確にし「聞き出そう」とする積極的な姿勢が大切であり，そこから新しい「気づき」を得ることができることなど，探究における調査の方法について学ぶことができた。

栗林公園の観光ガイドによる説明

香川大学避難訓練シミュレーション体験

穴吹医療大学校でグループワーク

高松市美術館学芸員による講話

香川大学スキルラボラトリー体験

２　東北防災・環境研修

(1) 研修の目的

グローカル授業の現地研修として，地震・津波という自然災害に遭い多くの被害に見舞われた東日本大震災被災地を訪問し，震災・津波被害の実態に加え，過去の経験により実施されている防災対策に関する研修，さらに震災後の環境再生に関する取組に参加することにより，防災・環境に関する探求活動に生かすことを目的とする。

(2) 研修の概要

日程：令和３年 10 月 24 日(日)～26 日(火)
参加生徒：高校１年 16 名(男子３名，女子 13 名)，高校２年８名(男子４名，女子４名)
引率教員：國木，大石，久米
研修場所
11 月 24 日：名取市海岸林再生プロジェクト
11 月 23 日：南三陸震災学習プログラム，震災遺構（大川小学校），震災語り部クルーズ，松島散策
11 月 25 日：仙台城址，震災遺構（荒浜小学校）

(3) 成果

１年 16 名，２年８名の計 24 名が参加した。各所での聞き取り調査や，ボランティア活動を通して，防災・環境について現地研修を行い，以下のような成果を上げた。

① 震災被害の実態を感じ取り，今後の防災のあり方について探求し，また地元香川県の防災対策について考えることができた。
② 震災後の地域復興や環境再生の取組について理解を深め，今後香川県内で災害が発生した際，復興するために必要な取組について考えることができた。
③ 現地の環境再生に向けたボランティア活動に参加し，海岸林再生活動を体験したことにより，自分にできることを自ら実践する意欲と行動力を身につけることができた。
④ 関係者との積極的な交流を通して対話力やコミュニケーション能力の向上を図ることができた。

(4)生徒の感想等

① 名取市海岸林再生プロジェクト
- どんなに酷い状況下でも，様々な人が少しずつ力を合わせれば，時間はかかっても，とても素晴らしいものができあがるということを学んだ。
- 大学生やボランティアの方々と活動し，コミュニケーションを取りながら楽しんで作業に取り組んだ。自分たちが手直しした箇所が少しでも役に立てば嬉しく思う。
- 周囲に反対されながらも，仲間たちと協力してここまでチームを作り上げてきたリーダーの吉田さんを尊敬する。

② 南三陸震災学習プログラム
- 巨大津波が押し寄せた南三陸の人口が激減しているという事実に驚いた。これまで東日本大震災について理解しているつもりだったが，現地に行って現地の人と話してみないと分からないことがたくさんあると実感した。
- 正直，地震・津波というものが自分とほぼ関係のないものだと感じていた。しかしいつ発生するか予測不可能な災害への恐れから，自分事として捉えられるようになった。
- 津波の被害に遭った旧防災庁舎を取り壊すか後世のために遺すか議論があったことを聞き，今後も自然の脅威を伝え知ってもらうために，震災遺構としてここ南三陸に遺し続けてほしいと思った。

③ 震災遺構（大川小学校）

・地震発生からこの学校に津波が到達するまで，50 分という高台に避難するまで十分すぎる時間があった。子どもたちの安全を守るために先生方が必死の思いで下した判断であっても，74 人もの命が奪われたことに，深い悲しみを覚えた。

・冷静になって考えれば高台に避難する選択ができたはずなのに，大人の判断力を失くしてしまうほど地震・津波が恐ろしいことを知った。

・学校近辺は，大きな被害により「かつてここに町があった」「人が暮らしていた」とはとても思えないほど何も無かった。しかしこの大川小学校は，自然の恐ろしさを伝えられる唯一の場所だと強く感じた。

④ 震災語り部クルーズ

・島での土砂崩れの発生や繰り返し押し寄せる津波にも負けず，犠牲者数が他地域に比べ少なかったことに驚いた。それでも犠牲者が出てしまった一番の要因として，一度避難したにも関わらず家に引き返してしまったことが挙げられていた。自分の身に同じことが起きたときには十分注意したいと感じた。

・どのような状況でも，まずは自分の命を守ることを優先すべきだと分かった。想定外な事態が常に発生し得ることを心掛けたい。

・一人一人それぞれに大切な明日がある。しかし，その明日が必ず来るとは限らない。「ありがとう」「ごめんね」を伝えたい人がいるならば，今すぐにその気持ちを言葉にしておくべき。悔いの残らぬように。

⑤ 震災遺構（荒浜小学校）

・現地では当時の津波発生時の記録映像を視聴した。黒く濁った水が勢いを増しながら瓦礫を巻き込んで校内に流れてくる状況を目の当たりにし，自分がその場にいたら恐ろしくてたまらないだろうなと思った。そのような中でも冷静に行動することのできた町民の方々や児童生徒たちはすごいと心の底から感じた。

・語り部さんの話が自分の想像を越えていて，思わず涙が出てきた。決死の判断で小学校に逃げてきた人達は助かって良かったけれど，家に居続けた人も多くいたことを聞き，一つの判断で生死が分かれてしまうのはとても怖いことだと実感した。

・大川小学校と同様，多くの児童が命を落としたことを聞き，心が痛んだ。四国地方も南海トラフ地震が発生するかもしれないので，この小学校で実践されていたように備蓄用品を備え，また普段から避難訓練に取り組んでおくべきだと感じた。

３　岐阜スポーツ・芸術研修

（１）研修の目的

グローカル事業のスポーツ及び芸術研修として，サッカーＪ３チームとして地域連携事業に積極的に取り組んでいるFC岐阜と，岐阜市のシンボルともなっている岐阜城を訪問し，スポーツを通した地域連携の取り組みや文化財を生かしたまちづくりの実態に関する研修を行うことにより，①スポーツ関係者による地域貢献の取り組みと熱意を心と体で感じ取り，現在の香川県内のスポーツ振興上の問題点や，今後のスポーツを通じた地域振興策の在り方について探究し，現在の課題の改善点をまとめて関係機関に提言できるようにする，②世界を目指して活動するクラブチームと合同研修を行うことにより，チームとしての戦術やトレーニング方法を探究し，今後の個人の技量やチーム力の向上につなげるとともに，香川県予選を突破して全国大会に出場し活躍できるチームづくりを実現する，③日本有数の文化遺産である岐阜城の活用の様子を体感し，文化財を生かしたまちづくりの方法を探究することにより，香川県内で自分にできることを考えて行動する力を身に付ける，④訪問先の関係者と積極的な交流を図り探究力とコミュニケーションの向上を図ることを目的とする。

（２）研修の概要

日程：令和３年12月18日（土）～19日（日）

参加生徒：サッカー部員高校１年23名（男子23名），高校２年13名（男子13名）計36名

引率教員：國木，陶山

研修場所と主な研修内容

12月18日：岐阜城訪問，FC岐阜クラブハウスでFC岐阜のスポーツを通しての地域振興探究

12月19日：名古屋商科大学グラウンドでFC岐阜U-18アカデミーと合同研修

（３）成果

岐阜城探究では，斎藤氏や織田信長による天下統一の過程を学ぶとともに，文化財を生かしたまちづくりによって，その地域の価値を高めそこに暮らす人々の夢を育む土壌が醸成されることがわかった。何より天守閣から眺める景色の素晴らしさを楽しむことができ，今研修への大いなる期待が膨らんだ。

FC岐阜では，クラブチームによる地域連携や地域貢献の取組み，スポーツビジネスの具体例などについての講話を聞いた後，スポーツによる地域振興方法などについて質疑応答を行った。多くの生徒が積極的に質問を行い，コミュニケーション交流の活発な探究を行うことができた。

19日のサッカー戦術探究では，FC岐阜のユースチームと練習試合を行いながら，強豪チームの戦術やトレーニング法などについて探究を行った。参加した生徒全員が少しでも多くのことを学ぼうと真剣に探究活動に取り組むことで，日常の部活動におけるゲームでは学べない様々な気づきを得ることができていた。

（４）生徒の感想等

①FC 岐阜クラブハウス訪問

・コロナ禍で受けた影響は大きいが，その中を乗り切るためには新しい発想と取り組みが必要だとわかった。FC 岐阜はＪリーグチームで唯一，岐阜県全 42 市町村との関係を築いていることや県内外 275 社からの協力をしてもらっていると知り，周りの人たちを巻き込んでいくという方法がすごいと感じた。

・クラブハウスを一般市民の方々と共有し，ともに並んでトレーニングしていることに驚いた。

・サッカーだけではなく，フットゴルフやサイクリングクラブなどへの取り組みがされていて，結果としてサッカー自体に興味があるわけではない人々への FC 岐阜の認知度を高めることや，さらに愛着を持ってもらえるきっかけになることがわかった。

・Youtube での配信などの活動をはじめ，コロナ禍でもできることをする中，Ｊリーグクラブ史上初の Vtuber「蹴球夢（しゅうきゅうゆめ）」の就任や，おうち時間の過ごし方について選手やマスコットの出演する動画を投稿するなど斬新な手法でサポーターや視聴者に提供する事業をおこなっていることに感動した。

・日頃どうしたら朝食を摂ることの良さを広めることができるか考えていたが，人々の生活に入っていくことが大切だと分かった。朝食の良さを書いたカレンダーやマグネットなどを作り，サッカー大会や地域の祭りなどで配ることで多くの人たちに知ってもらえると気づいた。

・スタジアムをイベント化し，リーグ戦で応援に来たアウェーのサポーターに岐阜県のご当地グルメを味わってもらい，再度アウェーゲームに訪れて楽しんでもらう工夫が素晴らしいと思った。

②FC 岐阜 U-18 アカデミーとの合同研修

・選手一人ひとりのプレーの質が高く，身長の高さにたよらないでヘディングの跳ね返しをするなど，驚かされることが多々あった。また，狭い局面でもしっかりとタッチを決めて，パスも丁寧に出せていた。なかなかボールを奪えなかったし裏のスペースの取り方が上手で参考になった。

・ボールをつないで攻めるスタイルで，特に遊びのボールの素早さと正確さが勉強になった。

・ミーティングやウォーミングアップの際に一人ひとりの意識が高く，見習いたいと感じた。

・常にプロのゲームやトップチームの選手を意識しながら日々を過ごしているユースチームと全国大会を目指す僕たちのチームとの違いは，技術の差であることだと感じた。

Ⅳ　生徒探究レポート

１　　１年生探究活動要旨・発表用スライド（p.43～p.59）

２　　２年生地域創生案企画書（p.60～p.83）

３　　『高校生国際シンポジウム』

　　研究要綱・発表用ポスター（p.84～p.86）

香川県立高松北高等学校

安心して楽しい旅を増やすには？ ＃ＪＫが答えを探してみた！

川西里奈　河野未希　西谷愛佳　松井梨乃　安友美琴

（キーワード　　小豆島、高校生、観光、感染対策）

１．はじめに

観光地として高校生にも知られている小豆島だが、特定の場所のイメージが強いことから、まだ知られていない場所の魅力をアピールし、かつ、コロナ禍の今だからこそ楽しさと同じぐらい感染対策が重要だと思った。この２つの観点を意識した旅を提案したいと考えた。女子高生ならではのアイデアでまずは、身近な高校生のもつ小豆島のイメージから変えていきたい。

２．探究の方法

（1）小豆島観光協会の方々へ電話インタビュー
（2）土庄町役場の方々へ電話インタビュー
（3）ベイリゾートホテルの方々へ電話インタビュー

３．結果

・コロナ禍の影響で観光客が減少している。
・重岩は、バスで行けるのでアクセスしやすい。体力がある高校生だからこそ楽しめる。
・ヤマサン醤油は、醤油味のソフトクリームがある。足を運ぶ機会がない。
・小豆島の観光地では基本的な感染対策はしているが、オリジナルの対策はしていない。

４．考察

インタビューで分かった場所を基に高校生に向けたマップ製作が有効だと考える。実際に自分たちが惹かれる場所が他の高校生にも魅力だと思う。また、感染対策はその地域のキャラクターを題材にオリジナルバッチ製作することも効果的と考える。現在使われているバッチと比べるとコロナを連想させるものが少ないことからコロナを良い意味で忘れさせることができると思う。

５．結論、今後の展望

女子高生目線で観光マップを制作した。製作したマップはクラスに掲示してもらい、まずは他にも多くの観光スポットが多いことを知ってもらう。コロナが落ち着いたときに実際に行くイメージを膨らましてもらいたいと考えている。このことから自分たちが提案をするだけでなく、自ら観光スポットについて調べてもらえるきっかけにもなる。また製作したバッチは、主にマップに掲載する場所へ配りたいと考えている。コロナ禍の前とは、違った方法で安心して楽しい旅を多くの高校生に送ってもらいたい。

６．おわりに

今回の探究活動を振り返って、有名な観光地はもちろんのこと、私たちが知らない観光地も知ることができた。若年層に向けた観光プランを観光協会や町役場は考えていることが分かった。作成したマップやバッチのアイデアを観光地と連携して地域を活性化していきたい。

７．参考・引用文献

小豆島観光協会の方々へのインタビュー、ホームページ
土庄町役場の方々へのインタビュー、ホームページ
ベイリゾートの方々へのインタビュー、ホームページ
ヤマサン醤油ホームページ

安心して楽しい旅を増やすには？

＃JKが答えを探してみた！

グローバル４１班
川西里奈　河野未希　西谷愛佳　松井梨乃　安友美琴

1

このテーマを選んだ理由

①高校生が観光する場所は決まりきった場所が多い
→他にもいい場所があるはずなのにもったいないので
いろんな人にも知ってもらいたい

②今の時代では感染対策も同じくらい必要
→感染対策がしっかりしていないと楽しい気持ちも半減してしまう

2

仮説

①決まりきった場所ばかり→SNSでは８割方同じような場所の投稿
＊決まりきった場所しか知らない
＊高校生だから行動範囲が限られている

②観光スポットが多い小豆島ならではの感染対策があるはず！

3

調査方法

＊現地研修を考えていたが、
行くことができなかった
→観光協会や町役場に電話して聞いてみた

小豆島観光協会とは…
小豆島の観光情報等、小豆島についての情報を発信している協会

おすすめスポット①

重岩（かさねいわ）

小豆島に数多く残る石切丁場のひとつ
＊高校生におすすめ
→登り切った時に達成感を味わえる
→ＳＮＳ映え
＊おすすめの季節
夏：景色がきれい
気温的に登りやすい

＊行き方
土庄港から約30分
（車：10分　徒歩：20分）

5

おすすめスポット②

ヤマサン醤油

小豆島で一番古い醤油屋
＊高校生におすすめ
→醤油味のソフトクリーム
→蔵見学ができる
＊豆知識
→朝、納豆を食べるともろみ蔵には入れない
→日本にある醤油桶は小豆島が４分の1占めている

＊行き方
草壁港から車で３分
坂出港から車で５分

感染対策について

基本的な感染対策しかしてない→観光客がより**安心できる**感染対策を！

＊デメリット＊
・費用が掛かる
・守らない人がいる
・本当にしているか分からない
・現実に戻された気分になる

＊解決方法＊
1．店自体や定員が感染対策をしていることがわかる何かが必要
2．その地域の特色などを生かした感染対策
3．**小さな安心の積み重ねが大きな安心につ ながる**

7

考察①

＊多くのおすすめスポットがあった
→高校生目線のマップ制作

＊マップの作成
→大きなマップを教室に配置

コロナが落ち着いたら実際にどこに行きたいかイメージを膨らまして調べてもらう。

8

考察①の続き

＊マップについて

9

考察②

感染対策をしているという表示がされたバッチやポスター
→感染対策がされていることが分かり安心や信頼の気持ちに

感染対策にその地域ならではの飾りつけ
→どんな時でも旅行に来ているという気持ちに
少しでもコロナのことを忘れることができる

10

参考文献

(小豆島観光協会)
https://shodoshima.or.jp
(土庄町役場)
https://www.town.tonosho.kagawa.jp
(ベイリゾートホテル)
https://bayresort-shodoshima.jp
(ヤマサン醤油)
https://shodoshima.npnp.jp
https://fujingasho.jp

11

香川県立高松北高等学校

香川県のスポーツを強くするには

中庭真矢翔　市山隼　田中陶子　細川元義　竹中徹平

（キーワード　　小学生低学年、遊び、競技スポーツ、強化育成）

１．はじめに

香川県の競技スポーツを強化したいと思い調査を始めた。「スーパー讃岐っ子育成事業」の対象年齢が小学校高学年であることから、その前段階である低学年に着目した。県内ではまだ取り組まれていない低学年を対象とした運動プログラムを作成することで、子どもたちが小さいうちから簡単に楽しく体を動かすきっかけ作りができるのではと考えた。

２．探究の方法

⑴ 香川県保健体育課の山下さんに「スーパー讃岐っ子育成事業」についてのインタビュー調査
⑵ R1 全国体力運動能力運動習慣等調査結果を用いた香川県の運動能力レベル調査
⑶ 小学校低学年を対象とした運動プログラムの作成

３．結果・分析

⑴ スーパー讃岐っ子育成事業の詳細な内容およびスポーツ体験プログラムについて。
⑵ 香川県は 47 都道府県の内 32 位で全国的に運動能力レベルが低いことが分かった。
⑶ 小学校低学年を対象とするため、遊びの要素を取り入れたプログラムを作成した。

４．考察

香川県の競技スポーツを強くするには、小さいうちから体を動かす喜びを体験する必要があると感じた。そこで、JSPO が推奨する「アクティブ・チャイルド・プログラム」を参考に、遊びの要素を取り入れながら、１年間を通してできる低学年向け運動プログラムを独自で作成した。作成にあたっては、遊びの要素を取り入れる、一般によく知られている種目に着目するなど、低学年の子どもたちが簡単に楽しく体を動かすきっかけづくりとなるよう工夫した。

５．今後の展望

今回作成した運動プログラムをさらに検討し、より実効性の高いものとした後、県下の小学校や放課後児童クラブ等に紹介して、実施していただけるように提案していきたい。将来、作成した運動プログラムを実践した子どもたちが日本や世界で活躍するアスリートへと成長してくれることを期待する。

６．おわりに

自分たちが小学校低学年だったら…と想像しながら、さまざまな「運動遊び」や「伝承遊び」について案を出し合い、楽しく探究することができた。香川県の競技スポーツが強化され、北高卒業生の宇山賢先輩（フェンシング）のように、香川県からも世界で活躍するアスリートが多く出てほしいと願っている。

７．参考・引用文献

香川県教育委員会
笹川スポーツ財団
ベネッセ　教育情報サイト
令和元年度全国体力運動能力運動習慣等調査結果
香川県教育委員会　保健体育課　山下様

香川県のスポーツを強くするには

スポ21班
中庭真矢翔,市山隼,竹中徹平
細川元義, 田中陶子

過程

1学期から中間発表会にかけて、ジュニアアスリート(中学生・高校生）を強くする方法を考えてきたが、自分たちが貢献するのは困難であると感じた。

~先輩のスポ72班の探求課題~

テーマ「香川県でスポーツの英才教育を」より

提案

『スーパー讃岐っ子育成事業』の対象を小学校低学年まで引き下げ、その育成プログラムを作成してはどうか？

仮説

小学生低学年から楽しみながら
積極的にスポーツと関わることで
身体の基礎ができ、
運動能力が高まるのではないか。

結果

スーパー讃岐っ子について

目的　日本や世界で活躍するアスリートの育成

対象　県内の小学4、5、6年生
（書類審査・体力測定による選抜）

内容　4年（25名）身体能力上げる
5年（10名）身体能力＋競技体験
6年（35名）中学で競技を選択するための競技体験

頻度　4年…10回　5年…17回　6年…17回
(月に2回程度)

指導者　競技団体の指導者、元オリンピックトレーナー等々

R1度全国小学生体力テストの比較

	男子	女子
1位	福井県	福井県
2位	大分県	茨城県
3位	石川県	秋田県
⋮	⋮	⋮
32位	香川県	香川県

上位3県の運動プロジェクトとその内容の比較

男子		（運動プロジェクト）	（対象年齢）
1位	福井県	元気パワーアップ作戦	小学4年以上～中学
2位	大分県	チャレンジ大分体力アップ	小学生
3位	石川県	石川県スポーツ推進計画2021	
女子			
1位	福井県	元気パワーアップ作戦	
2位	茨城県	いきいき茨城スポーツプラン	小・中・高まで
3位	秋田県	スポーツ立県あきた推進プラン	

分析

低学年対象育成プログラム作成にあたって①

低学年期はプレゴールデンエイジ期と呼ばれている

「即座の習得」…あらゆる動作を極めて短時間に覚えることが可能
幼稚園年小~小学3年頃は体の使い方の基礎が養われる時期

この時期の体験プログラムとして・・・

日本スポーツ協会推奨
アクティブチャイルドプログラム（ACP）

☆アクティブチャイルドプログラム(ACP)とは？？

伝承遊び…運動神経を発達させる要素が多い。

or

運動遊び…各種スポーツにおける導入段階

発達段階に応じた動きの習得

低学年対象育成プログラム作成にあたって②

１．遊びの要素
　ACPを参考に伝承あそび、運動あそびを取り入れた遊びの要素を含むこと

２．スポーツ種目の選定
　中学校部活動でも多くある一般的に普及しているスポーツを取り入れること

育成プログラムの作成

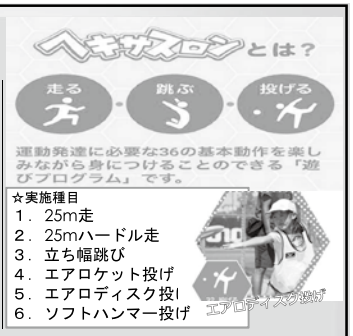
年間プログラム（低学年対象）

月にち	区分	種目	伝承遊び	向上が期待される能力
4月	前期	測定会	追って追われて	下半身の筋力、巧緻性
5月		陸上競技	落とさず捕まえろ	身体コントロール力、敏捷性、持久力
6月		バレーボール	タイミングジャンプ	リズミカルに動く力、タイミングを図る力
7月		バスケットボール	追って追われて	身体コントロール力、巧緻性、敏捷性、状況の判断力
8月	中期	水泳	水走りの術	筋力向上、持久力
9月		テニス	ろくむし	瞬発力、敏捷性、巧緻性、走能力、投能力
10月		体操	くもおに	筋力、筋持久力、柔軟性
11月		バドミントン	ねことねずみ	瞬発力、敏捷性、走能力
12月	後期	ドッヂボール	ショートトラックの勇者	下半身の強化、敏捷性、協調性
1月		サッカー	勝利は我にあり	下半身の強化、状況の判断、対応能力
2月		卓球	テニピン	
3月		測定会	タオル取りオニ	瞬発力、全身持久力、敏捷性、走能力

測定会

開催期：４月（前期）
３月（後期）

目的：
　プログラム参加者の成長及び変化を確認するため様々な運動要素を取り入れた測定会を実施
※測定種目はヘキサスロンを採用



水泳

開催期：８月（中期）

目的：水中で動くことを学び、
各種泳法やその他競技を体験する。

伝承遊び：水走りの術

効果：全身の筋力向上
持久力向上

サッカー

開催期：１月（後期）

目的：「蹴る」、「走る」動作を基本とし、集団の中で協調性を高める

伝承遊び：勝利は我にあり！

効果：下半身の強化
　　状況の判断
　　対応能力

考察

今後について

香川県下の小学校や放課後児童クラブ等に紹介

↓

プログラムの普及

↓

多くの子ども達がスポーツとかかわるきっかけづくり

↓

香川県から日本や世界で活躍するアスリートの誕生

参考文献

インタビュー
◦香川県保健体育科　山下様

資料掲載
◦香川県教育委員会
◦笹川スポーツ財団
◦ベネッセ　教育情報サイト
◦令和元年度全国体力、運動能力、運動習慣等調査結果

香川県立高松北高等学校

今の私たちにできること～ハンセン病と新型コロナウイルス感染症の人権問題を通して～

大谷　澪月　　中村　芽生

（キーワード　ハンセン病、人権、ＳＮＳ）

１．はじめに

最近、新型コロナウイルス感染症が流行しており、その中で人権に関する問題が起こっている。その様子が昔流行していたハンセン病に似ていると感じ、この２つの感染症には共通する部分があるのではないかと考えた。そして、この探究を通して、現在流行している感染症や今後流行するかもしれない感染症に伴って起きる人権問題との向き合い方について改めて考え、人権問題を減らしていく解決策を考えていくことが目的である。

２．探究の方法

① 国立療養所大島青松園へのフィールドワーク
② 人権・同和教育ＬＨＲでのオンライン講演会に参加
③ 香川県教育委員会人権教育課へのフィールドワーク
④ インターネットを利用しての情報収集

３．結果・分析

２つの感染症に関する人権問題には、「病気を知らない・病気が見えない・感染したくないという不安や恐れが差別に繋がっている」という共通点があり、どちらも人から人への噂が要因となっていた。さらに、新型コロナウイルスでは、ＳＮＳによる影響が大きいことがわかった。私たちの生活には欠かせないインターネット上では、様々な情報が飛びかっており、誰もが発信したり、目にしたりすることができるうえ、その中で本当の情報だけを見極めることは大変難しい。実際に、多くの人が情報の真偽については、わかっていなかった。そのため、新型コロナウイルス感染症のデマや噂は、ハンセン病よりも速く、広範囲に拡がったと考えられる。

また、これらの感染症の問題点として、１つの感染症から２つの感染症へと発展する負のスパイラルがある。まず、「第一の感染症」である病気そのものが、「第二の感染症」である不安と恐怖となる。さらに、病気についての正しい情報や知識があまりない時、私たちは見えない敵であるウイルスに強い不安や恐れを感じ、見えるものを嫌悪の対象とする。それが「第三の感染症」である、嫌悪・偏見・差別をもたらし、それらが拡大していくことがわかった。

４．考察、結論

「第二の感染症」である不安や恐怖は、デマやフェイクニュースが関与しており、若い年代ほど情報を信じた傾向があった。情報の真偽が不明な場合でも拡散してしまうのは、「興味深い」「人の役に立つ」「注意喚起」などの理由がある。そこで、「第二の感染症」である不安や恐れに振り回されないために、「気付く力」や「自分を支える力」が必要になる。さらに、「第三の感染症」である嫌悪・偏見・差別を拡げないために、「求められること」や「できること」があると考えた。

５．今後の展望

以上探究した内容をチラシにして、全校生徒に配ったり、公共の場に置いてもらったりして、多くの人に見てもらい、現在流行している感染症や、今後流行するかもしれない感染症との正しい向き合い方を伝えていくことを目標とした。

６．おわりに

今後も、感染症との正しい向き合い方を探究していきたい。そして、自分たちが「求められること」や「できること」について、主体となって活動を行っていきたい。

７．参考・引用文献

大島青松園　香川県教育委員会人権教育課　NIID 国立感染症研究所　総務省「令和元年通信利用動向調査」
河内長野市人権協　日本赤十字社　読売新聞オンライン

今の私たちにできること

～ハンセン病と新型コロナウイルス感染症を通して～

看護４１班　大谷澪月　中村芽生

動機・仮説・発表内容

・２つの感染症の特徴と共通する問題点・部分

・３つの『感染症』の顔と「負のスパイラル」

・総務省によるアンケート結果

・『第二の感染症』と『第三の感染症』を予防するためには

ハンセン病を通して現在や今後流行するかもしれない感染症との
向き合い方にいて改めて考える。

2つの感染症の特徴

ハンセン病	新型コロナウイルス感染症
らい菌の感染症 感染力は極めて弱い	多くの株がある 感染力が強い
末梢神経が侵され、体が変形	呼吸器症状、高熱、下痢、味覚障害
「らい予防法」のもと 療養所で隔離政策がとられた	ワクチン接種 まん延防止措置
国中が恐れ、 根強い差別意識が残った	誹謗中傷が多発

病気を知らない･病気が見えない･感染したくないという不安や恐怖が間違った
情報や偏見を生み、それが人から人へと広まって差別になる。

『第一の感染症』　見えない敵（ウイルス）への不安

↓

『第二の感染症』　見えるものを敵とみなして嫌悪の対象とする。

↓

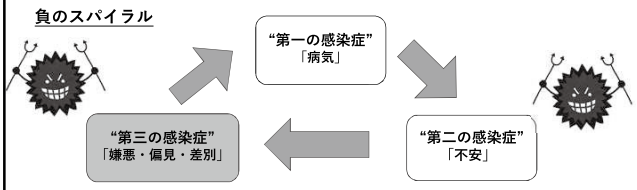
嫌悪の対象を排除し遠ざけることで束の間の安心感を得る。

↓

『第三の感染症』　嫌悪・偏見・差別につながる。

病気を知らない･病気が見えない･感染したくないという不安や恐怖が間違った
情報や偏見を生み、それが人から人へと広まって差別になる。

負のスパイラル



「負のスパイラル」から生まれる『嫌悪・偏見・差別』

「新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」（日本赤十字社）より

デマ・フェイクニュースの例

（総務省によるアンケート）

１、新型コロナウイルスは熱に弱く、湯を飲むと予防に効果がある。
２、茶、紅茶、漂白剤を飲むと新型コロナウイルス予防に効果がある。
３、こまめに水をとると新型コロナウイルス予防に効果がある。
４、納豆、ニンニクを食べると新型コロナウイルス予防に効果がある。
５、ビタミンDは新型コロナウイルス予防に効果がある。
６、花こう岩などの石はウイルスの分解に即効性がある。
７、新型コロナウイルスは5Gテクノロジーによって活性化される。
８、日本で緊急事態宣言が発生されたら3週間ロックダウン（外出禁止）を行う。
９、日本政府が4月1日に緊急事態宣言を出し、2日にロックダウン（外出禁止）する。
１０、日赤病院が「コロナ病床が満床」、「現状では医療崩壊のシナリオも想定」という発表を行なった。
１１、トイレットペーパーは中国産が多いため、新型コロナウイルスの影響で不足する。
１２、武漢からの発熱症状のある旅行者が、関西国際空港の検疫検査を振り切って逃げた。
１３、新型コロナウイルスは、中国の研究所で作成された生物兵器である。
１４、死体を燃やしたときに発生する二酸化硫黄（亜硫酸ガス）が武漢周辺で大量に検出された。

総務省によるアンケート結果

（2020年５月13日～14日実施　普段インターネットサービスを週1日以上利用している15歳～69歳の男女2000人を対象 ）

「1つでも見たり、聞いたりしたことがある。」･･･72%

「1つでも正しいと思った、情報を信じた。」
「正しい情報かどうか分からなかった。」　･･･76.7%

「拡散を経験したことがある。」　･･･35.3%

デマ・フェイクニュースを信じ、差別につながった。

仕方がないこと[illegible]のかもしれない。

「負のスパイラル」を断ち切るために

『第二の感染症』予防

●「気付く力」を高める
自分を見つめ直し、今の状況を整理してみる。

●「自分を支える力」を高める
自分の安全や健康のために必要なことを見極めて、
自ら選択をすること。

「負のスパイラル」を断ち切るために

『第三の感染症』予防

正しいことを知る → 想像する → 配慮ある行動

●むやみに口伝えやSNSでデマを広げない
自分が差別をされた立場になって差別解消の主体者となる。

●言葉にする
根拠のわからないデマ・フェイクニュースに出会った時
間違った情報を見つけた時

ご静聴ありがとうございました

出典：香川県教育委員会　日本赤十字社　NIID国立感染症研究所
総務省「令和元年通信利用同行調査」　いらすとや

協力者：香川県教育委員会　　安河内先生　大井先生
大島青松園　職員の方々
高松北高校　福本先生　高木幸先生

その他の参照：読売新聞オンライン　Google　河内長野市人権協会

香川県立高松北高等学校

高松北高　石あかりプロジェクト２０２１

漆原菜々美　野村那由多　船川浩志

（キーワード：源平合戦　屋島の戦い　源平石あかりロード　史跡　Oh!鎧講座）

１．はじめに

私たちの学校の近くで、毎年９月に「源平石あかりロード」というイベントが実施されている。地元のイベントを高松北中高生にもっと知ってほしいと思ったのがきっかけである。フィールドワークを経て、イベントの課題や関係者の熱い思いを知り、探究活動を通してこのイベントを高松北中高生に広め、高松市牟礼町そして庵治町の活性化につなげたい。

２．探究の方法

・石あかり実行委員会に所属する讃岐加工協同組合理事の島本健一郎さんへのインタビュー調査の実施
・高松北中高生を対象とした「源平石あかりロード」に関するアンケート調査の実施
・現地に赴き、石あかりロード道中に存在する史跡の現状の確認
・源平合戦中の歴史、並びに史跡の調査

３．結果・分析

・そもそもこのイベントは、源平合戦最中に行われた屋島の戦いの史跡を紹介するために企画されたということを知った。石あかり実行委員会でも、史跡の更なる認知を望んでいることを理解した。
・高松北中高生のあいだで、「源平石あかりロード」のイベントは広く知られていることがわかった。一方で、実際にイベントに足を運んでいる人が少ないという現状が浮き彫りとなった。
・イベントの本来の目的及び、史跡についての理解はほとんどないに等しく、史跡自体についても際立って目に留まるようにもなっておらず、存在感を感じづらかった。

４．考察

「石あかりロード」という名前だけが一人歩きし、イベント本来の目的が失われている現状を一度払拭させる必要がある。そのため、見て回るだけではなく参加型のイベントを設けるべきだと考える。また、史跡周辺に看板等を設置し、史跡を目立たせる必要もある。このイベントや私たちの活動を地元で広めるために、さらに情報を発信するべきである。

５．結論、今後の展望

琴参観光株式会社の協力で、「Oh!鎧講座」という観光ツアーの企画を立ち上げ、マスコミにも取材していただいた。これを機に「源平石あかりロード」をより多くの方に知っていただくために、まずは高松北中高生にこのイベントと本来の目的を知ってもらえるように努めていきたい。また、高松市牟礼町を代表するイベントとして地元を盛り上げることができるように、今後はツアーのシリーズ化を２年生とともに計画していく予定である。

６．おわりに

探究活動を通して、「源平石あかりロード」がなぜ誕生したのかを理解できた。地域について詳しく調べていくうちに新しい発見が生まれ、その度にそれらを広めていく方法を考え、興味関心をさらに深めながら、活動に取り組むことができたと感じている。

７．参考・引用文献

讃岐加工協同組合理事　島本健一郎様へのアンケート　高松北中高全校生へのアンケート
石あかりロードＨＰ　琴参観光株式会社ＨＰ

高松北高
石あかりプロジェクト2021

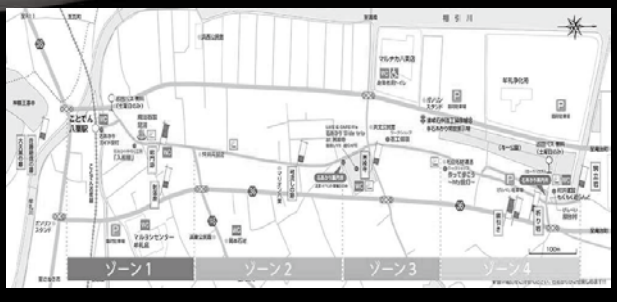
香川県立高松北高等学校

漆原菜々美　野村那由多　船川浩志

探究の動機

「源平石あかりロード」とは

石あかりロードの全容　約1．2km



Q.そもそも源平合戦とは？

1180年から1185年の5年にわたって繰り広げられた
二大勢力：源氏と平家による争乱

↓

（開始）「安徳天皇即位により皇位継承が絶望的となった
「以仁王」が「源頼政」と組み、挙兵。

↓

「源頼政」が「以仁王」に打倒平氏を持ち掛ける。

屋島合戦から壇ノ浦まで

・壇ノ浦までの道中、屋島において源氏と平家の軍が衝突。

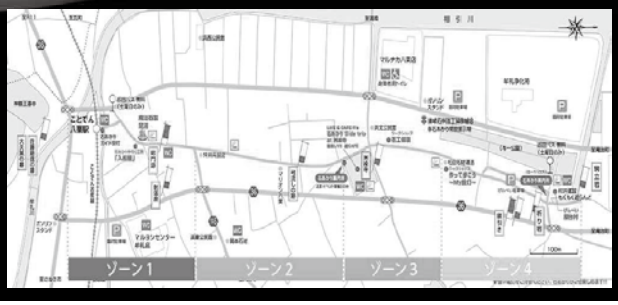
↓

・義経の弓流しや那須与一の扇の的等の逸話が有名。

これにより、数々の史跡が生まれる。

（終了）壇ノ浦合戦の後半、潮の流れが変わり源氏を後押しする流れに「安徳天皇」は、平清盛の妻「二位尼（＝平時子）」に抱きかかえられて入水

石あかりロードの全容　約1．2km



石あかりロード周辺の史跡

駒立岩

祈り岩

史跡の数は12個 → なぜ知名度が低いのか？

石あかりロードから推測される結果

Q.石あかりロードという名前だけが一人歩きしているのではないか？

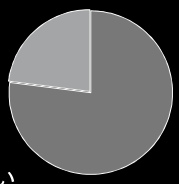
解決への手段：中高生を対象としてアンケートを実施。

↓

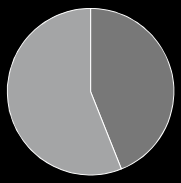
石あかりロードの知名度、並びに捉えられ方の確認

アンケート結果

石あかりロードを知っているか



行ったことがあるか



■はい
■いいえ

史跡の比較

(1)日中と夜間において史跡の景観が明かりの有無で大きく異なる。

(2)史跡自体が目立っていないため、石あかりが上手く設置されていても、史跡と史跡を結ぶ役割を果たせていない。

(3)史跡の設備の老朽化が著しいものとなっている。

史跡の現状

・イベント期間中に史跡をライトアップして、目立たせていない。

・石あかりの光に負けて史跡が暗くなり、見えにくくなってしまっている。

↓

イベント期間中でもそうでなくても、史跡をライトアップする。

考察

・イベント本来の目的を見失う

・参加型のイベント

・史跡を目立たせるための工夫

ご協力いただいた方・参考文献等

・讃岐石材加工協同組合理事　島本健一郎様

・www.ishiakari-road.com/about.htm

・十河勲様

・琴参観光株式会社
http://kotokan.co.jp/japan/entry-73.html

今後の展望

・原点回帰＆更なる活性化

・「高松北高　石あかりプロジェクト」の継続